

中国の少数民族地域の現況

(中国北方民族オロチョンにとっての
生活変容と「伝統」意識)

坂部晶子(名古屋大学人文学研究科)

海外言語文化演習(中国)
2025年6月18日(水)

講義の流れ

0. 時代の趨勢と「民族」の位置づけ
1. 中国における民族の位置づけ(問題の所在)
2. 三度の歴史的飛躍というシナリオ
——建旗 60 周年記念大会
3. 伝統的祭の再興と民族的伝統への意識
4. 「強いられた主体性」そのものを生きること
5. レポート作成

0. 時代の趨勢と「民族」の位置づけ

- 国民国家(nation-state)とエスニシティ(ethnicity)

- アメリカの独立宣言(1776年)

- 日本の「北海道旧土人保護法」(明治32年〔1899年〕)

「アイヌの人たちを日本国民に同化させることを目的に、土地を付与して農業を奨励することをはじめ、医療、生活扶助、教育などの保護対策をおこなうもの」(~1997年まで存続)

- ソ連の民族政策(初期／1920年代)

「ソヴェト政権は少数民族への母語による教育を普及させ、それらの民族の言語の利用範囲を大幅に拡大したことは否定しがたい」

- 中華人民共和国成立(1949年)

1. 問題の所在 (中国における民族の位置づけ)

- 「国家によって認定された少数民族」
- 民族識別工作 1950年代

同化主義への批判。ソ連の民族政策がモデル。

「当時自己申告した民族名称は 400 余りだったが、スターリンの『共通の地域・言語・経済生活・文化心理的要素』という民族定義を指針に、国家の主導によって識別工作が行われた。しかし、調査者側の識別基準や判断と当該民族側の意識とのずれなど、実際の作業においては様々な混乱が見られ、上記の基準に合わない事例もあった」(劉 2006:41)

○「制度によって保障された多民族性」

- 「ソ連の民族理論に影響されつつ、中国の独自性として、民族平等のために呼称上全ての民族をいかなる差異もなく『民族＝nationality』と称した」(シンジルト 2003:47)。
- 千数百万人から数千人まで幅のある個々の民族は、「少数民族」として一律に確定され、アイデンティファイされている。

○「民族」の構築性が問題なのではなく、そうした「構築された民族」がすでに60年以上にわたって生きられている点が重要。

○ロシアでシベリア先住民を研究する佐々木史郎は以下のように指摘する。

「結論を簡単にいってしまえば、現在、先住民はナーナイ、ウリチ、ニヴヒといった行政的に規定されたいわば官製の民族を自己の民族的帰属意識の対象として実体化している。(略)つまり、ソ連は国民を民族という単位で整理、把握する政策を執ったが、それを行政的に規定し直して住民を再編成し、戸籍に登録したのである。そして、固有文化の保護と称して、この官製民族を単位とする文化を学校その他の教育の場で人々の頭に刷り込んだ。さらに、コルホーズやソフホーズなどを結成して、人々を特定の村落に定着させるに際して、アムール川下流域では、この民族を単位に人々をまとめたのである。そして、それから三〇年以上たち、世代交代が進むとともに、官製民族は自らの帰属集団として人々の意識の中に定着した(佐々木 2003:54-55)

- ロシアにせよ中国にせよ、半世紀以上にわたり社会主義体制のもとですすめられてきた生活や社会制度の近代化のプロセスがある。それをここで「社会主義的近代」と呼ぶとすれば、その社会主義的近代においても、当然ながら、近代化と伝統文化が完全に融和していたわけではない。
- 改革開放以前の中国の少数民族地域においても、言語や一定の生業は維持されながらも、その社会変容は著しいものがあつた。
- 社会主義的近代と伝統とのかかわりがどのようなものであつたのかを知るためには、中国社会で「国家によって認定された民族」の人びとが、その状況をどのように受け入れ、また改変してきたのかについてみていくことが必要である。

- 人類学・社会学での観光研究

民族文化の観光化

→先進国がヘゲモニーを握るグローバリゼーションの流れのなかで「強いられた主体性」として批判的にとらえる。

- しかし、そのようにカテゴライズするだけでは、今まさに現実のなかで人びとに生きられている地域社会のさまざまな営みを捨象することになってしまう。

- ここでは、2011 年9月に、内モンゴル自治区フルンボイル市オロチョン族自治旗において開催された自治旗建旗 60 周年記念大会での三つのイベント(篝火祭、競技場での開幕式、劇場での公演)をとりあげ、現在のオロチョン族にとっての「伝統」意識の諸相を明らかにしたい

2. 三度の歴史的飛躍というシナリオ——建旗 60 周年記念大会

○オロチョン族の現在

内モンゴル自治区および黒龍江省を中心に居住。現人口は 8000 人程度。

50 年ほど前に、山中での移動型狩猟採集生活から定住村での生活へ。1990 年代には「狩猟」も禁じられる。

民族語についても、当時 40 歳以下の人びとにはほとんど継承されていない。

○オロチョン自治旗建旗 60 周年記念大会

オロチョンたち自身の地方政府として中国全体で最初にできた人民政府成立 60 周年を記念して、2011 年 9 月に開催。対外的なものではない。



○三度の歴史的飛躍というシナリオ

「人口の少ない民族が、社会形態、生活様式、生産方式の三度の歴史的飛躍をなしとげた。この三度の生産生活様式の歴史的飛躍は、オロチョンの猟民にとって一種の思想観念の衝撃と変革であり、オロチョン旗の発展史において輝く光をたたえている」（オロチョン自治旗 HP「和谐一甲子 跨越几千年——庆祝鄂伦春自治旗建旗 60 周年」より）

- ①1951 年オロチョン旗成立。区域自治を実現。
- ②1958 年移動型狩猟生活から定住を実現。
- ③1996 年に全オロチョン旗において禁猟を実施し、現代的な産業を発展させる道筋にのったこと。

→これらの飛躍のプロセスは、「オロチョン民族が主体的に推進し、獲得してきた成果である」と喧伝。

○中国社会の発展史観からみた、オロチョンの人びと

- 「小民族」

→「根蒂不深、人数又少」(費孝通)、人口が相対的に少ないことにくわえて、「社会発展のレベルが相対的に低く、伝統文化は全体として比較的単純」(何 2006)

- 「最後の狩猟民の一つ」

→原始公有制から社会主義への「直接過渡(直接的移行)」(《鄂倫春族簡史》編写組・《鄂倫春族簡史》修訂本編写組 2008: 178-179)、「跨越(越え出ること、飛躍)」(麻 2003)を成し遂げた民族。

3. 伝統的祭の再興と民族的伝統への意識

○三つの主要なイベント

- 9月2日夜の「かがり火祭(篝火節)」
- 9月3日午前の「開幕式」
- 9月3日の夜(から数回)劇場で行われた「ウランムチ(烏蘭牧騎)」の公演

○民族文化の意味との関係での特徴

- ①当該民族としてオロチョン族の人びとを巻き込んでいく体制ができている点。小中学生に限らず拡散して居住している自治旗内のオロチョン族の主要人物が集合。
- ②専門家集団による民族的な伝統文化の提示→「ウランムチ」という文芸団体の役割

3-1. 当事者として巻き込んでいく体制

○開幕式:

- 歩んできた道のり(三回の転換期を強調した物語)を語る:4人の語り手のうち老女性はおロチョン旗内の最高齢女性。
- 男性の騎馬部隊が10数名、トラックを駆ける。
- 小中学生のマスゲーム。
- 各「獵民村」代表のおロチョンたち:7個の天幕の周りにずっと座り続ける役柄。

←民族研究会の手配。地域にすむおロチョンの老人たちの情報等を集約。

←「参加するのは光栄だ」という感想

○イベントの選にもれた人は、ホテルや観光ガイドなどのボランティアとして参加。

3-2. 専門化する「民族文化」

○ウラムチ(烏蘭牧騎)の公演 ミュージカル「勇敢なるオロチョン」

- 出演者は劇団員を中心に組織され、演出、監督は北京から招かれ、一か月以上前から準備。
- 公演は、各地の幹部を対象に。一般の人はリハーサルに潜り込む。
- オロチョン旗のウラムチ＋民族研究会所属の中老年のオロチョンのエキストラ
- かがり火祭や開幕式でも民族舞踊の指導的役割

○ウランムチの変遷

- 内地の文化館の牧畜地域における発展形
- オロチョン旗のウランムチは 1963 年3月 17 日設立。当初は、隊員わずか 15 名。公演を主に、スライド上映、移動展覧会、衛生の宣伝、移動図書販売、文芸指導等。
- 現在は、地域の職業的芸術家集団。団員は、舞踊隊、楽器隊、歌唱隊をあわせて 91 名。オロチョン、エヴェンキ、ダウール、モンゴル、漢族など多様。若手の 95%程が舞踊学校・音楽学校の卒業生。

○ウラムチによる民族の歌や舞踊の継承

「(40 年前に) どうしてウラムチをつくる必要があったのか。わたしたちの民族の文化を伝えていくためよ。もしこのウラムチがなければ、民族文化はきっと広められてはいかなかった。今のようなこんな感じで続いてはいなかった、でしょう？ 日本と同じように、あなた方の民族文化は、現在までいつまでも伝えられている。それはあなた方が伝承しているからでしょう」(58 歳オロチョン女性、歌手)

「前にいた指導者がわたしに言ったのは、あなたはほかの団員とは違う。オロチョン人だから。あなたには自分の言葉があり、言葉ができる。あなたは、自分の民族の民歌やいろいろな文化を伝えて、広めていかななくてはいけないよ。この仕事をやり遂げるべきだよ。多くの生徒たちに教えなさい。とりわけオロチョンの生徒たちに。彼の影響はとても大きかった」(40 代オロチョン女性、歌手)

4. 「強いられた主体性」そのものを生きること

○オロチョンの民族文化

語りによる伝説の伝承(ジャンダーレン)/シャーマニズムにまつわるもの/白樺の樹皮や毛皮などの加工品/山菜や動物などの食料化に関する知識/民歌と踊り

→芸術学校の卒業生たちによって担われ、「専門芸術化」されたかたちであるとはいえ、オロチョンの歌と踊りとされているものは民族文化として積極的に継承、維持されている。

○若者の意識

「この（芸術）団の将来については、期待は大きいな。今は、指導者たちのレベルでもこういった文化事業や、伝統民族芸術の保存、保護にたいする注目、関心が高まっている。だんだんこうした見方や関心が高まっているんだ。これからはあちこちの指導者層の支持を得て、また我々それぞれの団員の努力も含めて、将来の見通しはすごくいいと思うよ」（24 歳オロチョン男性、ダンサー）

「他のところで勉強したいとも思う。必ずしもこのオロチョン族だけじゃなくて。ただまだまだいっぱい勉強したいよ。他の民族、ダウールやエヴェンキなんかも。外国にも行って、いろんな民族のことを理解してみたい。ぼくは個人的にはインディアンののが好きなんだ。すごく憧れる。とっても神秘的だよ」（28 歳のダウール男性、ダンサー）

○「三度目の歴史的飛躍」というシナリオにおいて
→1996 年の「禁猟」が三度目の飛躍として位置づけられる。

○40代オロチョン幹部

「禁猟」というのは中性的な単語で、「狩猟禁止」と等しい。しかし、これに『被』という字を加えると、意味は自然と広がる。1996 年オロチョン猟民は主体的に猟銃を手放した、あるいは、主体的に猟銃を手放させられたともいえることが、オロチョン民族文化の発展の分水嶺だった」(40 代オロチョン男性、政府幹部)

→オロチョンたちの主体性が「強いられたもの」であることを、当地人たちもよく知っているということを意味する。

- 外部からの影響のなかで否応なしに選択され、断片化されていく伝統文化であったとしても、そこに関わりをもちうることは、やはり人びとにとって一種の生活上のチャンスでもあると意識されている。

○民族郷の若者の感想

「オロチョンの 60 周年記念に参加できるのは、すごく光栄だよ。だれでも来れるわけじゃない」(20 歳前後オロチョン男性、民族郷から)

- 開幕式で、野外テントのまわりで円形に座するという役回りのために、オロチョン民族郷からやってきた若者
- 彼らの周囲には、イベントに参加する機会自体がない人びとの存在がある。

参考文献

(日本語)

- 足立重和、2004、「地域づくりに働く盆踊りのリアリティー—岐阜県郡上市八幡町の郡上おどりの事例から」、『フォーラム現代社会学』第3号、83－95 頁。
- 窪田幸子・野林厚志編、2009、『「先住民」とはだれか』、世界思想社。
- 坂部晶子、2011a、「中国少数民族の人類学的・社会学的研究についての一考察——主として何群『民族社会学和人類学応用研究』をとおして』『北東アジア研究』
- 坂部晶子、2011b、「北方民族オロチョン社会における植民地秩序の崩壊と再編」、『帝国崩壊とひとの再移動——引揚げ、送還、そして残留(アジア遊学 145 号)』、勉誠出版。
- 坂部晶子、2015、「中国北方民族オロチョンの民族イベントにおける「伝統」意識——建旗60周年記念大会を事例に」、『北東アジア研究』26号。
- 佐々木史郎、2003、「ロシア極東地方の先住民のエスニシティと文化表象」、瀬川昌久編『文化のディスプレイ——東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』、風響社。
- 佐々木亨、2002、「満洲国時代における観光資源、展示対象としてのオロチョン」、煎本孝編著『東北アジア諸民族の文化動態』、北海道大学図書刊行会。
- シンジルト、2003、『民族語りの文法——中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』、風響社。
- シンジルト、2010、「オランムチル現象にみる内モンゴル・インパクト」、小長谷有紀・川口幸大・長沼さやか編『中国における社会主義的近代化——宗教・消費・エスニシティ』、勉誠出版。
- 瀬川昌久、2012、「中華民族多元一体構造論と民族行政の現場における民族認識」、瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』、昭和堂。
- 高倉浩樹、2008、「序 ポスト社会主義人類学の射程と役割」、高倉浩樹・佐々木史郎編『国立民族学博物館調査報告 78 ポスト社会主義人類学の射程』、国立民族学博物館。

- 西澤治彦、2008、「解題——費孝通の『中華民族の多元一体構造』をめぐって」、費孝通編著(西澤治彦・塚田誠之・曾士才・菊池秀明・吉開将人共訳)『中華民族の多元一体構造』、風響社。
- 費孝通編著、西澤治彦・塚田誠之・曾士才・菊池秀明・吉開将人共訳、1989 = 2008、『中華民族の多元一体構造』、風響社。
- 麻国慶、2003、「狩獵民族の定住と自立」、『人文学報』第 338 号。
- 劉正愛、2006、『民族生成の歴史人類学——満洲・旗人・満族』、風響社。

(中国語)

- 《鄂倫春族簡史》編写組・《鄂倫春族簡史》修訂本編写組、2008、《鄂倫春族簡史》、民族出版社。
- 《鄂倫春族自治旗概況》編写組・《鄂倫春族自治旗概況》修訂本編写組、2009、《内蒙古・鄂倫春自治旗概況》、民族出版社。
- 鄂倫春自治旗史誌編纂委員会、1991、《鄂倫春自治旗誌》、内蒙古人民出版社。
- 鄂倫春自治旗史誌編纂委員会、2001、《鄂倫春自治旗誌(1989-1999)》、内蒙古人民出版社。
- 鄂倫春自治旗史誌編纂委員会、2011、《鄂倫春自治旗誌(2000-2009)》、内蒙古文化出版社。
- 関小雲、2003、《大興安嶺鄂倫春》、哈爾濱出版社。
- 何群、2006、『環境与小民族生存——鄂倫春文化的變遷』、社会科学出版社。
- 何群、2009、『民族社会学和人類学応用研究』、中央民族大学出版社。
- 内蒙古鄂倫春民族研究会、2008、《保護与伝承——鄂倫春民族文化研討会論文集》。
- 全国政協文史和学习委員会暨内蒙古自治区、黒龍江省政協文史資料委員会編、2008a、《鄂倫春族百年実録(上冊)》、中国文史出版社。
- 全国政協文史和学习委員会暨内蒙古自治区、黒龍江省政協文史資料委員会編、2008b、《鄂倫春族百年実録(下冊)》、中国文史出版社。